

ドゥルーズの『意味の論理学』の注釈と研究——出来事、運命愛、そして永久革命——
(博士論文概要書)

鹿野祐嗣

本論文は、『差異と反復』(1968)に続くジル・ドゥルーズ第二の主著『意味の論理学』(1969)に固有の哲学体系の全貌を、テキストに忠実な注釈を基調としつつ、出来事の超越論的哲学、運命の受容ではなく変様を意志する運命愛、そして存在論的な永久革命としての永遠回帰という相互に一体をなす三つの観点から明らかにしていくものである。

ドゥルーズ哲学の特色の一つは、同時代としては比較的珍しい体系性の強さにあると言ってよい。だが、逆にその体系性の強さゆえに、同じ名をもつ基礎概念が、各著作の体系に依拠して多かれ少なかれ内容を変えたり、場合によっては消失したり復活したりすることさえある。また当然のことながら、ガタリとの共著になると、ドゥルーズ単独で書かれた著作とは内容が大きく変わることになる。よってわれわれは、多くの先行研究がそうしてきたように複数の著作を混ぜ合わせて、緩やかなドゥルーズ哲学のイメージをつくりあげるのではなく、『意味の論理学』一冊の体系に的を絞る。そうして、『意味の論理学』への詳細な注釈とその網羅的な考察をおこなうことで、ドゥルーズ研究の水準を一段階上へと高めることを目指す。実際、特に先行研究の少ない『意味の論理学』の哲学体系を明確にしていく作業は、今まではあまり指摘されてこなかった『差異と反復』と『意味の論理学』の間にある重要な変化を見えるようにしてくれるとともに、『意味の論理学』と『アンチ・オイディプス』の間にある距離の大きさをあらためて示してくれもするのである。

本論文の序章では、『意味の論理学』の読解を進めていくために、われわれはまず『差異と反復』の哲学体系の概要を確認し、ジジェクやバディウらの影響によって広まったドゥルーズ哲学に関する基本的な誤解を解消しつつ、1960年代のドゥルーズ哲学を貫く根本的なモチーフを提示する。そして本章では、『意味の論理学』の体系が、第一次領域(狂気あるいは乳幼児期の経験)、第二次組織(出来事の属す超越論的な場)、第三次整序(言葉によって分節化された日常的な経験)という三つの次元から構成されていることに基づき、著作を構成する三四の系列^{セリ}を再編して以下のような道筋で論述を展開していく。第一章では、われわれは経験的な事態に関わる第三次整序から出発し、出来事の超越論的な場である第二次組織へと上昇していくことで、両者の本質的な異質性を強調する。その際、出来事の形而上学が言葉に表現される「意味」の理論として展開されることを踏まえて、ドゥルーズ独自の意味=出来事の理論を、フレーゲ、マイノング、リミニのグレゴリウス、スコトゥス、アヴィセンナ、さらにはストア派といった先駆者の諸理論と比較し、いわば哲学史の裏街道の中に位置づけていく。第二章では、第二次組織から精神病の経験を通じて第一次領域へと遡った後、精神分析理論によって語られる第一次領域から第二次組織への上昇(力動的発生)の過程を探求する。『差異と反復』にはなかった第一次領域の発見は、『差異と反復』と『意味

の論理学』の間での存在論的な枠組みの変化を示し、また第一次領域から第二次組織へと進む過程の詳細な読解は、クライン理論を基調にしたドゥルーズの精神分析理論（あるいは哲学への精神分析の組み込み）の豊かな独創性を示すことになる。最後に第三章では、他の思想との比較を通じて第二次組織の存在論的な身分をより明確にした後で、第二次組織から第三次整序への移行（静態的発生）の過程を探求する。前者はドゥルーズ哲学とラカン、クロソウスキー、ロトマン、シモンドンらの思想との比較を、そして後者はドゥルーズ哲学の発生論におけるライプニッツ哲学の役割とその再解釈を基軸に据えてなされる。

われわれはこうした注釈作業の全体を通じて、1960年代のドゥルーズ哲学の核心が、存在論的な原理と価値批判の原理の分離不可能性を背景にした、存在論的な永久革命としての差異と反復の永遠回帰思想にあるということを示す。いかなる先行的な同一性を經由することもなく、差異あるものだけを還帰させる永遠回帰の極限的な一貫性（カオスについて言われるカオスマス）は、存在論的な水準での革命的アナーキズムであると同時に、革命的アナーキズムのモチーフが隅々まで浸透した存在論でもある。原則としては社会的な領野に関して言われるはずの革命は、あらゆる領野を貫く永遠回帰の存在論それ自体を特徴づける形象となり、永遠回帰の反復それ自体が一種の革命的な運動として語られることになる。ドゥルーズはこのモチーフを『差異と反復』で完成させ、『意味の論理学』ではそれを軸にして別の存在論的な体系を構築してみせたのである。

『意味の論理学』は、まだ実現されていない諸々の理想的な出来事が普遍的に連繋する諸構造を、非人称的かつ前個体的である超越論的な場とみなすことで、〈私〉や自我、意識ではなく多数多様な出来事に基づくような超越論的哲学を展開した。ストア派の二元論の再解釈に基づき、そこでは能動と受動の関係に入るもののすべてが「物体＝身体」と、またポテンシャル状態にあるがゆえにそうでないものが「非物体的＝非身体的なもの」と呼ばれ、両者の対が経験的な事態と超越論的な出来事の対に重ねられていく（経験が狂気の第一次領域と日常の第三次整序の間で相貌を変えるのに対応して、物体＝身体間の混合状態は二つの相貌をもつ）。そのとき、非物体的＝非身体的な出来事が、言葉ないし命題においては意味として表現されうるものであって、指示される事態でもなければ表明される人物でもなく、さらには指意される概念でさえない限り、出来事の超越論的哲学は常に、世界を言語的に構造化して分節化する意味の理論と重なり合う仕方で提示されることになる。

言葉に関して言えば、それ自体は非物体的＝非身体的な意味による分節化があつてこそ、諸々の物体＝身体の混合の只中で言葉が単なる物理音や線の連なりから区別されている以上、意味とはまさに、言葉を理解可能にするものであると同時に、言葉そのものを発生させる条件でもある。意味は、言葉で指示される事物や事態のように言葉の外に実存するわけではなく、自らが実存させている言葉の中に表現され、またそうした言語的な表現の中でのみ存立しているのだが、あくまでもそれ自体においては言葉に先行し、事態からと同様に言葉からも独立している。意味とは、言葉の中で表現されたものである以前に、それ自身においては言葉の中で表現されうるものなのである。『意味の論理学』において、非人称的かつ前

個体的な出来事は、このような純粹状態の意味と重ねられる。言葉の中で表現されうる意味、それも実詞による指示とは異なる仕方で、動詞によってのみ表現されうるような意味、それこそがまさに物体＝身体への実現から切り離された純粹にして反實現的な出来事なのである。そして、このような意味あるいは出来事の次元としての第二次組織（超越論的な表面、形而上学的＝メタ物理的な表面）こそが、存在論的な永久革命としての永遠回帰に結びつけられることになる。第一次領域とは、革命的な第二次組織の源泉でありながら、絶えずその第二次組織へと昇華しておかなければならない破滅的な無秩序であり、第三次整序とは、革命的な第二次組織によって生まれる安定した秩序でありながら、絶えずその第二次組織によって変形し革新していかなければならない体制的な秩序なのである。

たしかに、超越論的な場を構成する多数多様な出来事の相互連繋は、これから第三次整序の經驗的な事態の中に創造されていくものを予め完足的に規定している。多数多様な出来事間の差違＝微分的な諸関係に対応して形成される出来事の布置とは、われわれ個々人の經驗的な生に先立ち、予めそれらをすべて規定している運命の星座に他ならない。だが、出来事の諸構造は賽の一振りによって絶えず変形されており、差異あるものだけを還帰させる永遠回帰の中で、運命は絶えず別のものへと変形され続けている。賽の一振りは、出来事の組み合わせを変えて再配置し、出来事の一義性としての存在の一義性、つまり多数多様な出来事についてのみ言われる〈ただ一つの同じ出来事〉を再形成する。このとき、一義的な存在、あるいはすべての出来事が連繋することで築かれる〈ただ一つの同じ出来事〉とは、賽の一振りの変形運動を通じて二次的に構成（再構成）されたものに他ならない。だが、賽の一振りもまた起源や根拠の同一性をもつことはなく、それ自体が反復されたものである限り、出来事の一義性の形成と賽の一振りの開始は重なり合い、双方が永遠回帰という絶え間ない変形の運動を表現するものとなる。それゆえ、差異と反復の永遠回帰において、意味（出来事）は常にそれを贈与する無意味（賽の一振り、運まかせの点、対象＝ x 、準原因、空虚な柵目、フィアット……）と共現前する関係にあり、超越論的な場は永遠回帰における差違化＝微分化の反復から切り離しえない。非物体的＝非身体的な出来事の実現は、經驗的な物体＝身体の次元を差異化＝分化し、新たな仕方で分節化していくわけだが、実は当の出来事そのものが、超越論的な場における差違化＝微分化の運動から切り離しえないのである。

こうした意味において、真の意味での運命愛とは、実現された宿命を諦念とともに受容することを意味せず、むしろ反対に、出来事の諸構造を変形するべく賽の一振りを放ち（準原因、運まかせの点への同一化）、実現すべき運命そのものの変化を意志することにある。たしかに、出来事の永遠回帰の思想は、出来事を意志し、肯定し、実現へと導くことを要求する。だがそれは、到来する出来事へと受動的に身を任せること（厭世的なルサンチマン）でもなければ、到来する出来事に対して自発的な同意という最小限の能動性をもって答えること（通常のスストア派的道徳）でもなく、むしろ出来事をその変異とともに意志し、賽の一振りという理想的な遊戯＝賭けを試みることと一体でしかないのである（超人の運命愛、い

わば革命家へと変貌したストア派の賢者の姿)。〈私〉なき意志において、言い換えれば無意識の純粹思考としての賽の一振りにおいて、文字通りすべてが変わる。社会革命はもちろんのこと、癒えようのない傷に抗して傷の意味を変え、戦争の只中でそれに抗するための戦争を遂行し、死を単なる肉体の物理的な崩壊とは何か別の死へと変異させることができるのは、まさに永遠回帰の運命愛と一体になった力の意志だけなのだ。

こうした考え方それ自体は、『差異と反復』において既にある程度示されていたと言ってよい。『意味の論理学』では、純粹な出来事や表現される意味の観念が前面に押し出されているとはいえ、それら二つの観念は『差異と反復』でも素描されており、そこを貫いている永久革命としての永遠回帰は『差異と反復』の核心をなしてもいたからである。ストア派の二元論の採用という重要な変更はあるにせよ、出来事の一義性としての存在の一義性や、出来事の永遠回帰、意味の理論の最終的な結論だけを見るのであれば、それらは基本的には『差異と反復』の内容を補足し延長するものだと捉えることも不可能ではない。では、『意味の論理学』の他にない独自性とはどこにあるのか？

それは第一に、意味が属す表面の第二次組織に先立つ深層の第一次領域の設定と、第一次領域から第二次組織へと向かう力動的発生の過程の導入にある。『差異と反復』では、潜在的なもの（構造）と強度（差異の力）が一体になって超越論的なものを構成していた。潜在的な構造は、それを表現する強度の時空的力動によってのみ現働化され、逆に強度の力は、自らの表現する潜在的な構造によって完足的に規定されているのだった。だが『意味の論理学』では、こうした構造と力の一体性が崩され、第一次領域という構造化されていない剥き出しの力の状態が導入される。ドゥルーズ自身がそのような言葉遣いをしているわけではないにせよ、極めて単純化して言うのなら、日常的な経験を構成する第三次整序がコスモスであり、永遠回帰の第二次組織がカオスモス（高次の極限的な一貫性をもつカオス）であるのに対して、第一次領域とはすべてを混ぜ合わせて輪郭や境界を失わせる剥き出しのカオスなのである。こうして『意味の論理学』では、「構造」や「問題」といった語彙は残されながらも、それらと同義であった「潜在的なもの」という語彙が使われなくなり（第二次組織には第一次領域が先立っている）、また回数こそ激減しているものの幾度かは使われる「強度」という語彙も、明らかに以前と同じ内容を表現するものではなくなる。『差異と反復』の強度は、原理的に常に構造と一体になったポテンシャル・エネルギーであったが、『意味の論理学』には、構造化される以前の、言い換えれば構造から相対的に独立している力や力動、エネルギーが導入されているからである。

続いて、『意味の論理学』の第二の独自性は、こうした剥き出しのカオスが構造化されていく力動的発生を説明するために、『差異と反復』とはまったく違う仕方で、主にクライン派の精神分析理論を大々的に導入したことにある。力動的発生の過程は、荒れ狂う死の欲動の下で寸断された物体＝身体と器官なき物体＝身体が相剋する深層の妄想分裂ポジション、深層の暴威を鎮めるべくそこに失われた高所が介入してくる抑うつポジション、そして死の欲動から離脱した性欲動が物的＝身体的な表面を形成する性ポジションとそのエディ

プス・コンプレックスといったように、大まかにはクラインのポジション理論に依拠しながらそれを独自に修正した仕方で描かれる。数ある修正点の中でも、際限なき破壊的な寸断に抵抗する器官なき物体＝身体という極の導入、破壊欲動からも保存欲動からも離脱した性欲動が活動する性ポジションの設定、そして良き意図に基づくがゆえに危害性も父子間の葛藤もなきエディプス・コンプレックスの三点は、ドゥルーズが他に見られない独自の仕方で精神分析理論を哲学の中に組み込んだことを示すものであると言えよう。ただし、『アンチ・オイディプス』以降とは異なり、『意味の論理学』における器官なき物体＝身体とは強度でもなければ卵らんでもなく、決して肯定的な概念としては扱われていないことに注意したい。『意味の論理学』の主役は、アルトーではなくキャロルである。つまり、深層の病者としての統合失調症者スキゾフレーズではなく、むしろ表面の詩人としての倒錯者こそが、存在論的な永久革命を生きる者のモデルなのである。

重要なのは、以上のことから明らかなように、1960年代のドゥルーズ哲学において、存在論的な枠組みの変化が精神分析への態度の変化と連動して起こっているということである。物体＝身体と非物体的＝非身体的な出来事というストア派の二元論は、ドゥルーズ自身が述べていることとは裏腹に、少なくとも遺された資料や文献に基づいて判断する限り、物体＝身体に関して深層の第一次領域のイメージを与えてくれるものとはまでは言えない。むしろ、第一次領域の迫害的で攻撃的なイメージが、実際のところ明らかにクラインの妄想分裂ポジションに基づいて描かれている以上、存在論的な枠組みの変更の要因は、ストア派の二元論の採用よりもクラインのポジション理論の採用にあると言わなければならない。周知のようにドゥルーズは、意識や自我、〈私〉に依拠するのではなく、力や構造とともに無意識の場から新たな存在論を築こうとしたため、無意識を探索する精神分析が得た成果を、自分自身の存在論の中に積極的に組み込んでいった。そうした理由から、ドゥルーズの存在論は、精神分析理論の扱いや位置づけを変更すると、それに連動するかたちで内容が変更されるようになっているのである。

当然、これはその後のガタリとの遭遇が引き起こした衝撃と思想的転回に関しても同じことが言える。ドゥルーズはガタリとともにまた別の新たな哲学体系を構築していくが、それはやはり『意味の論理学』の頃とはまったく異なる精神分析への態度なしには成立しえないことなのである。『意味の論理学』における精神分析理論への修正提案と、『アンチ・オイディプス』における精神分析の家族主義的なモチーフへの徹底的な攻撃のどちらが正しく、また生産的であるかという問題は、『意味の論理学』の読解を目的とする本論文の守備範囲を大きく超える問題であるため、われわれはあえてその答えを出すことはしない。だがいずれにせよ確実なのは、そのような見解の転換を引き起こしたのはあくまでもガタリであって、ドゥルーズ自身ではないということである。ドゥルーズ自身は、たとえエディプス・コンプレックスの父権的な側面については懐疑的であったにせよ、決して精神分析それ自体に批判的だったわけではなく、実際にはむしろその反対ですらあった。当時のドゥルーズにとって、精神分析とは「出来事の学」であり、少なくとも『意味の論理学』の時点では、精

精神病や統合失調症が革命的だとみなされていたわけではまったくなかった。逆にだからこそ、ドゥルーズにとってガタリとの遭遇は決定的に重要な転機だったのである。

では、ガタリの衝撃以前、同じ存在論的な永久革命を核に据えた『差異と反復』と『意味の論理学』の間ならば、どちらを高く評価すべきだろうか？ ドゥルーズ自身は、おそらくはガタリとの出会いによって精神分析への評価が一変したこともあり、力動的発生において精神分析に大きく依拠する『意味の論理学』には、晩年になるとあまり高い評価を与えなくなった。ガタリの考え方の正否は括弧入れしている以上、われわれはそれとは別の観点から評価を与えていくことになる。

われわれからすれば、『意味の論理学』の問題点は、力動的発生を人間の精神分析に全面的に依拠して構築することにより、あらゆる領野を貫く普遍性をもたなければならない永遠回帰の存在論の中で、人間以外の存在者の位置づけが曖昧にならざるをえないということであった。一方では、出来事の場合が経験的な世界のすべてを創造する発生の条件である以上、動植物だけでなく無機物もまた、例外なく出来事の境域から生みだされているのでなければならない。だがそうすると、性欲動やエディプス・コンプレックスを見出すのは困難な生物や無機物に関して、それらが深層の第一次領域に属することがあるのかどうか、仮に属すとすればそれらはどのようにして第二次組織へと到達するのか、エディプス・コンプレックスの崩落以外の経路があるならばなぜそれを描かないのか、逆にある種の生物や無機物が第一次領域には属しないとすればなぜ人間だけがそこに属しうるのか……といった数々の疑問が生じてこざるをえない。非人間主義の存在論の根底に、極めて人間的な原理が置かれたこと、そこに『意味の論理学』の体系の根本的な問題点がある。反対に、原理的に構造と力が常に一体になっているとともに、精神分析が上述のような仕方で特権的な役割を果たすことのない『差異と反復』の体系では、こうした問題が生じることはなく、その点で普遍学としてより一貫性がある。よってわれわれは、少なくとも哲学体系の一貫性という意味では、『意味の論理学』より『差異と反復』の方がよく構築されていると考えている。

ただし、存在論的な永久革命のモチーフと照らし合わせるならば、『意味の論理学』の方にも優れた点がないわけではない。『意味の論理学』の体系は、良識と常識が支配する日常的な第三次整序の体制を突き崩すものに関して、深層の第一次領域と表面の第二次組織の二つを明確に区別している。これは、既成の現働的な状態を突き崩すものを二種類に分け、真に革命的な運動（永遠回帰のカオスモス）を、ただすべてを闇雲に破壊するだけの運動（深層のカオス）から峻別することに他ならない。ここに、心理的ないしは社会的な実践を評価する際の重要な視点がある。至極当然のことではあるが、社会の現状を変えるもののすべてが革命的なわけではない。また同様に、日常的な常識と良識を打ち砕くものの中でも、真に革新的で創造的な芸術に向かうものと、底なしの狂気の奔流にしか至らないものとは、やはりどこかで区別される必要がある。常軌を逸脱した振る舞いのすべてが創造的であるわけではないし、既成の諸価値の体制を脅かすものが必ず賽の一振りを放つわけでもない。こうした意味において、『意味の論理学』の優れた点は、第二次組織を第一次領域から切り離す

際、修正されたポジション理論に基づく力動的発生の過程を導入することで、革命的な創造と破壊的な狂気の区別を可能にする批判的な視点を提供し、またさらに、狂気を創造へと昇華させていくための道筋をも素描しているという点にある。人間を対象とする精神分析が根底の領域に置かれた以上、『意味の論理学』の体系は、こと人間的な領野の問題に関しては、『差異と反復』にも『アンチ・オイディプス』にもない判別の視点と、それに基づく実践への応用可能性とを提供することができるのである。